

## 「でも」か「で」と「も」か：「だ+とりたて詞」の諸相

著者	沼田 善子
雑誌名	文藝言語研究．言語篇
巻	52
ページ	37-48
発行年	2007-10-31
その他のタイトル	‘ DE ’ or ‘ DE+MO ’ ? : A Study on ‘ DA ’ +Toritate Focalizer
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/91612">http://hdl.handle.net/2241/91612</a>

# 「でも」か「で」と「も」か ——「だ+とりたて詞」の諸相——

沼田 善子

## 0. はじめに

- (1) そんなことは子供でも知っている。
- (2) 民間人でも攻撃の対象となる。

上の「でも」は、先行研究では、従来から一形態素として扱い係助詞、取り立て助詞等とする立場と、「で」と「も」に分析する立場に分かれ、前者の立場をとる菊池康人(2003)等に対し、後者の立場をとる定延利之(1995)等があり、近年でも必ずしもその扱いが一定でない。また「で」と「も」に分析する立場にも、「も」を接続助詞とする湯沢幸吉郎(1953<sup>1</sup>)等に対し、提題の助詞とする佐久間鼎(1940<sup>2</sup>: 235-238)等に分かれる。

本稿の筆者も沼田善子(1986: 177-178)では、(1)(2)のような「でも」について、「で」と「意外」のとりたて詞「も<sub>2</sub>」に分析できる可能性は示唆したが、一語のとりたて詞とするか否かについては保留した。

ここでは、改めてこの「でも」(便宜上、以下ではこの「でも」を意外の「でも」と呼ぶ)を取り上げ、「でも」を中心に「でさえ」「でだけ」等をも視野に入れ、以下のことを述べる。

- (3) a. 「意外」の意味を表す「でも」は、copula「だ」の中止形「で」に「意外」のとりたて詞「も<sub>2</sub>」<sup>3</sup>が後接したものである。
- b. しかし、「意外」の「でも」は、文中の分布等から見て、他のとりたて詞が「で」に後接したものよりは、「で」と「も」の結合が緊密で、より一形態素的である。

<sup>1</sup> 本稿では1977年復刻の『口語法精説』を参照した。

<sup>2</sup> 本稿では1956年刊行の『現代日本語法の研究』(恒星社厚生閣)を参照した。

<sup>3</sup> 沼田(1986: 157-158)を参照されたい。

## 1. 先行研究

意外の「でも」は、阪田雪子(1971:531-532)では「極端な、あるいは特殊な場合の提示」等の意味を表す係助詞とされた。また、寺村秀夫(1983:135)では取り立て助詞「譲歩のデモ」、菊地(2003:85)では「極限系」のとりたてを表す形式とされる。係助詞、取り立て助詞等の違いはあるものの、いずれにせよ、これらの研究では「でも」は一形態素として扱われる。

一方、倉持保男(1971:531)、阪田(1971:532)が指摘するように、湯沢(1953:273)は、これらの「でも」を「で」と「も」に分ける。また、佐久間(1940)、定延(1995)等も「で」と「も」に分析する立場をとる。

湯沢(1953:273)は、次のような例をあげ、これらが先行の名詞と共に「述語の文節」を構成するとして、指定の助動詞「だ」の連用形「で」に接続助詞「も」のついたものと分析する。

- (4) a. 定価は 二百円でも〔二百円デアッテモ〕高いとは いえない。  
 b. さんしょうは 小粒でも〔小粒デアルケレドモ〕 からい。  
 c. 米は 重要な 食品でも〔食品デアルケレドモ〕 それだけでは  
 生きて いけない。 (例文中の下線は筆者による)

湯沢(1953:238)は、形容詞連用形に後接する「厳しくても」等の「ても」を一語の接続助詞と分析し、これとの平行性から「嚴重でも」のような場合を、形容動詞連用形<sup>4</sup>に接続助詞「も」が後接したものとする。これと連動して、

(4) の場合も指定の助動詞「だ」の連用形「で」に接続助詞「も」が後接したとする。しかしこれはむしろ、「嚴重でも」「二百円でも」と同じく、「厳しくても」も「厳しくて」に「も」が後接したと考え、全て用言の中止形に提題の助詞「も」が後接したとする佐久間(1940:233-239)に従う方が妥当だろう。

定延(1995)は、とりたて詞「も」の種々の用法や取り立て詞「でも」の内部構成を心的プロセスから捉えようとする研究である。この中(同:245-255)で、「でも」は「お茶でも飲むか」(同:245)等の「でも」も含めて判定詞「で」に取り立て詞「も」が後接したものとされ、判定詞「で」は、当該集団から「観

<sup>4</sup> 湯沢(1953)は「嚴重でも」等を「形容動詞」とする。

察対象の指定をことさら表し、この心的プロセスを支援・強化する」(同：248)と述べられる。また、本稿で扱う「でも」は、判定詞「で」に「意外」の「も」が後接したものとされる。

佐久間(1940)、定延(1995)はそれぞれに説得力があり、本稿もこれらと同様に「でも」を「で」と「も」に分けて考えるが、ここでは、述語動詞への後接可能性等に関わる「でも」の文中での分布、あるいは「で」を述語代用の「だ」の中止形と考える可能性の可否等、これら先行研究とは異なる観点を加え、改めて意外の「でも」について考察したい。

## 2. 種々の「で」+とりたて詞「も」

具体的な考察に入る前に、本稿で考察の対象としない「でも」について見ておく。

- (5) a. この夏は東京でも35度を超える日が続いた。  
(格助詞「場所」+「で」+「も」)  
b. 大学へはバスでも行ける。  
(格助詞「手段」+「で」+「も」)  
c. どうせ私なんか、きれいでもないし、りこうでもないわよ。  
(形容詞+「も」)  
d. 太郎は親友の息子であると同時に、自分の学生でもある。  
(判定詞「だ」+「も」)

上のような「でも」は、「で」と「も」に分析できるものだが、(5a)(5b)は格助詞「で」にとりたて詞「も」が、(5c)は形容詞にとりたて詞「も」が後接したと考えられるものであり、本稿では考察の対象としない。また、(5d)も明らかに名詞述語にとりたて詞「も」が後接したと分かるものであり、考察対象から除外する。

なお、(5a)(5b)や次の(6)のような「でも」は格助詞「で」にとりたて詞「も」が後接したものと、(1)(2)に類する「意外」の「でも」とも考えられるものである。両者の見分けは、実際の用例では困難な場合も少なくないが、当該の用例を前者と捉えた場合は考察の対象外となる。

- (6) ブラジルはさすがに遠く、飛行機でもまる1日以上かかる。

### 3. 「意外」の「でも」における「も」の任意性

「でも」を一形態素と認定する基準として、「も」の任意性の有無と、「でも」の「であっても」への交替可能性が考えられる。以下、この基準について順に見ていくことにする。

まず、「も」の任意性の有無について見てみよう。一形態素の「でも」は、「も」を除くことはできないが、「で」に後接するとりたて詞「も」は基本的に任意である。例えば、先の (5a~d) や (6) は、次のように「も」を削除しても文としては成立する。

- (5') a. この夏は東京でも で  $\phi$  35度を超える日が続いた。  
 b. 大学へはバスでも で  $\phi$  行ける。  
 c. どうせ私なんか、きれいでも で  $\phi$  ないし、りこうでも で  $\phi$  ないわよ。  
 d. 太郎は親友の息子であると同時に、自分の学生でも で  $\phi$  ある。  
 (6') ブラジルはさすがに遠く、飛行機でも で  $\phi$  まる1日以上かかる。

一方、(1)(2)の「でも」やこれに類する次の(7)は、「も」に任意性が認められない。

- (1') そんなことは子供でも /\*  $\phi$  知っている。  
 (2') 民間人でも /\*  $\phi$  攻撃の対象となる。  
 (7) a. 休日でも /\*  $\phi$  急患があれば往診に出かけた。  
 b. 高度200メートル以上の現場での作業は、ベテランのとび職人でも /\*  $\phi$  緊張した。

因みに沼田(1986:177-181)で一語のとりたて詞とした「選択的例示」の「でも」<sup>5</sup>は、次のように、「も」を削除することはできない。

<sup>5</sup> 定延(1995:253-254)では、これも指定の助動詞に「確定回避」の取り立て助詞「も」が後接したものとして「で」と「も」を分けるが、本稿では後述する述語動詞への後接可能性等から、これを一語の「でも」として「選択的例示」のとりたて詞「でも」と考える。

(8) たまには、彼女と映画でも／\*で  $\phi$  見に行こう。

このことから、「も」の任意性の観点からは、「意外」の「でも」が一形態素の可能性が高くなる。ただし、「も」の任意性については、次の点を踏まえる必要がある。

倉持(1971:531)が指摘するように、ここでの「でも」は「逆接条件の接続助詞」とされた次のような「でも」と連続的である。

(9) 雨が降っても、明日の旅行は決行します。

実際、後の節に見るように、(1)(2)(7)の「でも」は「であっても」に交代でき、この場合は(9)の「ても」との連続性がより明確になる。また、阪田(1971:532)も(9)と次の例の類似性を認め、この「でも」を「断定の助動詞「だ」の連用形「で」に係助詞「も」がついたもの」が「一語の接続助詞のような感じで用いられている」と述べる。

(10) 明日の旅行は、雨天でも決行します。

ただし、(10)の「でも」と「意外」の「でも」を区別する阪田の議論は、沼田(1986:175-177)で述べたとおり疑問があり、また、(9)の「ても」を接続助詞とすることの非妥当性は沼田(1986b)、沼田(2006:140-146)で述べたとおりで、これらは全て「で」にとりたて詞「も」が後接したのと考えられる<sup>6</sup>。そして、沼田(2006:140-146)の議論に準ずるならば、(1)(2)や(10)の「意外」の「でも」の「も」にも任意性を認めることになる。

沼田(2006:140-146)では、(9)のような「も」は、他の条件である他者、例えば「雨が降らなければ」「気温が適当ならば」等々に対し、予想では「明日の旅行を決行する」条件としては否定される自者「雨が降れば」を、「意外」のととりたて詞「も<sub>2</sub>」がとりたて、他の条件の場合は勿論、条件としては否定的に捉えられていた「雨が降る」という場合も「旅行を決行する」という意味を表すのだと考えられる。また、この際の「雨が降っても」は「雨が降れば」等の条件節を「も<sub>2</sub>」がとりたてる際の代用形であり、「も<sub>2</sub>」を削除する場合は

<sup>6</sup> これに関する議論の詳細は沼田(1986b)、沼田(2006:140-146)を参照されたい。

元の条件節が復元されるとして、「も<sub>2</sub>」の任意性が認められる。これに準じて(10)の「でも」を考えれば、「雨天で」は「も」が「雨天であれば」「雨天であるなら」等を取りたてた際の代用形ということになり<sup>7</sup>、「も」の任意性を認めることにつながる。

このように考えれば、「意外」の「でも」は「で」と取りたてた詞「も<sub>2</sub>」に分析できることになる。

#### 4. 「であっても」への交代

次に「であっても」への交代可能性について考える。

(8) で見た「選択的例示」の「でも」は、一語のとりたてた詞だが、これは「であっても」に交代することができない。次のようである。

(8") たまには、彼女と映画でも/\*であっても見に行こう。

これに対し、(1)(2)や(7)の各々の「でも」は次のように「であっても」に交代できる。

(1") そんなことは子供でも/\*であっても知っている。

(2") 民間人でも/\*であっても攻撃の対象となる。

(7') a. 休日でも/\*であっても急患があれば往診に出かけた。

b. 高度200メートル以上の現場での作業は、ベテランのとび職人でも/\*であっても緊張した。

こうした「意外」の「でも」が、(11a)(11b)の「ても(でも)」に連続する点、また、これらが形容詞、動詞の中止形にとりたてた詞「も」が後接したものと考えられる点については、先に見たとおりである。

(11) a. 体調が少々悪くても、試合に出場する。

b. 転んでもただでは起きない。

<sup>7</sup> 勿論、「も」を削除し代用形を元に戻した「明日の旅行は雨天であれば決行します。」は意味的には不自然になるが、文構成自体は成立する。

また (7) の「でも」は、「だ」の連体形「な」に逆接接続助詞「のに」が後接する「なのに」等に置き換えても文が成立する。(7) の「でも」に先行する「休日」, 「ベテラン職人」は二格, が格等の格にたつ名詞とも考えられるが, 「でも」の位置に「なのに」が現れ得ることから, 「休日で」「職人で」を「だ」の中止形「で」を伴った述語句とみることもしる。こうした点からも, 「でも」を「だ」の中止形に「も」が後接したものと分析する可能性が考えられる。

- (7) a. 休日でも／なのに急患があれば往診に出かけた。  
b. 高度200メートル以上の現場での作業は, ベテランのとび職人でも／  
なのに緊張した。

## 5. 述語代用「だ」か copula「だ」か

これまで, 意外の「でも」が, 「で」にとりたて詞「も<sub>2</sub>」が後接したものとして分析できる可能性が高いことを見てきたが, ここでは, 「も<sub>2</sub>」に先行する「で」が何かについて, 改めて考えてみたい。

先に見たように先行研究では, 「で」は断定の助動詞, 判定詞等とされた。しかし, 前節で見たように, 「意外」の「でも」の「であっても」への交代可能性や, 動詞, 形容詞等にとりたて詞「も<sub>2</sub>」が後接した「～ても」との連続性から, 「で」を奥津敬一郎 (1978) による述語代用「だ」の中止形とする可能性もあると考えられる。先行研究ではこうした点について指摘するものはないが, 次の (12) 等を見ると, この可能性について考えておく必要性が感じられる。以下では, この点について考えてみたい。

- (12) a. 彼は鰻を食べないと力が出ないが, 僕は鰻の丸干しを食べても／でも頑張れる。  
b. 地元の A 大学に通えば安心だが, 県外の B 大学に通っても／でも, 何とか家の手伝いは続けられるだろう。  
c. 太郎と結婚すれば最高だが, 次郎と結婚しても／でも不幸にはならないだろう。

(12) の各々の「でも」は, それぞれ述語「食べても」「通っても」「結婚しても」の動詞中止形「食べて」「通って」「結婚して」が, 述語代用「だ」の中



止形「で」に置き換えられたものとも考えることもできる。

しかし、次の場合は「でも」の「で」が代用する述語は考えにくい。

- (12') a. 彼は鰻を食べないと力が出ないが、僕は鰻の丸干し(を) ででも頑張れる。
- b. 地元のA大学に通えば安心だが、県外のB大学にででも、何とか家の手伝いは続けられるだろう。
- c. 太郎と結婚すれば最高だが、次郎とででも不幸にはならないだろう。
- (12'') a. 彼は鰻を食べないと力が出ないが、僕は鰻の丸干しを食べてでも頑張れる。
- b. 地元のA大学に通えば安心だが、県外のB大学に通ってでも、何とか家の手伝いは続けられるだろう。
- c. 太郎と結婚すれば最高だが、次郎と結婚してでも不幸にはならないだろう。

(12')の各々の例では、「でも」に先行する「で」を述語代用の「で」と考えざるを得ない。また、各々の「でも」に述語「食べて」等が先行する(12'')の例では、「で」が代用する述語は考えにくい。

この際、(12)の場合は、述語代用「だ」の中止形「で」に「も」が後接したものと考え、(12')(12'')は別の可能性を考えるというのは、合理的ではない。従って「でも」の「で」を述語代用「だ」の中止形と考えるのは難しい。

これについては田川(2005: 7-12)の議論が示唆的である。田川(2005: 10)は、Fukui, Naoki(1986)や久保(1994)の議論を踏まえ、(12'a)の「食べて」等の「て」が、動詞句等を名詞句、あるいは後置詞句としてまとめる機能を果たすと考え<sup>8</sup>。これに加え、「でも」が、南不二男(1974)のA段階にあたるような、主語が現れない比較的小さな節にしか後接しないという現象を踏まえ、この「て」に後接する「で」をcopulaの「で」とする。

本稿でも田川(2005)の考察を支持し、ここでの「で」をcopula「だ」の中止形と考えておく。

<sup>8</sup> 詳しくは田川(2005: 7-10)を参照されたい。

## 6. 「で」+他のとりたて詞

これまでは「でも」について考えてきたが、他のとりたて詞にも、次のように「でも」と並行して捉えるべき現象がある。

- (13) a. 太郎とでも強豪の相手チームと互角に戦った。  
b. 太郎とですら強豪の相手チームと互角に戦った。  
c. 太郎とでさえ強豪の相手チームと互角に戦った。  
d. 太郎とでは強豪の相手チームと互角に戦えなかった。  
e. 太郎とでこそ強豪の相手チームと互角に戦えた。  
f. 太郎とでなど強豪の相手チームと互角に戦えなかった。  
g. 太郎とでしか強豪の相手チームと互角に戦えなかった。  
h. 太郎とでだけ強豪の相手チームと互角に戦えた。

(13)の各々の文は、個々のとりたて詞の意味に合わせて文末を調整する必要があるが、いずれも「でも」同様、「で+とりたて詞」の形をとる。従って、仮に(13a)の「でも」を一形態素と考えれば、(13b)、(13c)の「ですら」「でさえ」等も一形態素と捉える可能性が出てくる。現に菊地(2003: 85-105)は、「さえ」「すら」とは別に「でさえ」「ですら」を一形態素と認める。この点で「でも」を一形態素と捉えるか否かは、「で」に後接する他のとりたて詞のとりえ方にも波及する問題となる。この際、改めて、一形態素とみなす基準が重要になるが、これまでの「でも」の議論を踏まえれば、他のとりたて詞の場合も、いずれも copula の「で」に各とりたて詞が後接したものと考えておくのがよさそうである。

## 7. 文中での分布

次に「でも」の文中での分布について見てみたい。

「選択的例示」の「でも」は次の(12)のように述語連用形に後接する位置に現れることができるが、(13)に見るとおり「意外」の「でも」はこの位置への分布は難しい。

- (14) a. 新しい資料が見つかりでもしない限り、これ以上の議論の進展は望

めない。

b. 彼は自分が探偵でもあるかのようにふるまった。

c. 服を汚しでもした時は必ず叱られた。

(15) a. \*一端暴れ出したら止めようがなく、親に殴りかかりでもする。

cf. 殴りかかりもする。

b. \*目的のためならどんな汚い手も使い、時には自分の手を汚しでもした。

cf. 汚しもする。

c. \*人の足を踏んでおいて、謝りでもしない。 cf. 謝りもしない。

「意外」の「でも」に見られるこうした分布の制限も、「で」に copula としての機能が残されているためと考えられる。

さて、これまで、「意外」の「でも」を「で」と「も」に分けて考えてきたわけだが、一方で、「でも」は同じく「で」にとりたて詞が後接したと考えられる「でだけ」等とは異なる分布を示す。

(16) a. このマジックなら、素人の僕でもやってみようという気になる。

b. 嫌いなものでもよく噛んで食べる。

c. 当時は海外からでも毎日のように電話がかかってきた。

d. 電子メールを使って、見知らぬ相手とでも気楽に情報を交換する。

「でだけ」「でしか」等は制限が多く、(16) のような位置には「でも」ほど自由に現れることはない。特に「でも」は (16a) のように主格名詞句や対格名詞句の後にも比較的制限なく現れるが、次に見るとおり、「でだけ」「でしか」等は、「名詞+で」が全体で条件節相当の解釈を受けるような場合でないと、こうした位置に現れることができない。

(16'a) (17a) (18a) のような位置に現れるのは、「でも」「でさえ」等に限られるのである。

(16') a. \*このマジックなら、素人の僕でだけやってみようという気になる。

b. \*好きなものででだけよく噛んで食べる。

(17) a. この問題は僕でも解いた。

- b. \*この問題は僕では解かなかった。(cf. この問題は僕では解けなかった。)
  - c. \*この問題は僕でだけ解いた。(cf. ??この問題は僕でだけ解けた。)
  - d. \*この問題は僕でしか解かなかった。(cf. この問題は僕でしか解けなかった。)
- (18) a. 彼はこの問題でも解いた。
- b. \*彼はこの問題では解かなかった。(cf. 彼はこの問題では解けなかった。)
  - c. \*彼はこの問題でだけ解いた。(cf. ??彼はこの問題でだけ解けた。)
  - d. \*彼はこの問題でしか解かなかった。(cf. ?彼はこの問題でしか解けなかった。)

上に見る「でも」「でさえ」の分布は、これらの「で」の意味的、統語的機能が希薄化していることを示す。こうした点で「意外」の「でも」「でさえ」等は copula「だ」の中止形「で」にとりたて詞がついたものと考えとしても、他のとりたて詞などの場合とは区別されよう。

因みに、「選択的例示」の「でも」も、定延（1995）や本稿の議論を踏まえて考えるならば、本来は copula「だ」の中止形に「も」が後接したものが、両者の結合がより緊密になり、一形態素化されて成立したと考えられる。それと同様に考えれば、「意外」の「でも」も「でだけ」等と比べると、これらよりは「で」と「も」の結合がより緊密であり、その意味では一形態素化が進んでいると考えられるのである。

## 8. まとめ

本稿では、いわゆる「極端な例示」等の意味を表す係助詞、あるいは「意外」「極限」の意味を表すとりたて助詞とされる「でも」として一形態素と考えられることのある「でも」について改めて考察し、以下のことを述べた。

- 1 「意外」の「でも」は、「で」と「も」に分析できる。この際、「で」は copula「だ」の中止形「で」であり、「も」は「意外」のとりたて詞「も<sub>2</sub>」である。
- 2 いわゆる「意外」の「でも」は、「でさえ」同様、他のとりたて詞が「で」

に後接したものとは比べ、主格名詞句、対格名詞句への後接等、文中の分布に関する制限が少ない。これは他のとりたて詞が「で」に後接したものよりは、「でも」「でさえ」の「で」の意味的、統語的機能が希薄であり、「でも」「でさえ」の一形態素化が他のとりたて詞の場合よりも進んでいることを示すと考えられる。

## 文献

- 奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハウナギダ」の文法 —— ダとノ ——』 くろしお出版
- 菊池康人 (1999) 「サエとデサエ」『日本語科学』 6 国立国語研究所 pp. 7-31
- 〃 (2003) 「現代語の極限のとりたて」『日本語のとりたて —— 現代語と歴史的变化・地理的変異』 くろしお出版 pp. 85-105
- 久保美織 (1994) 「日本語の動作・状態述語について」『国語学』 178pp. 90-100
- 倉持保男 (1971) 「ても」松村 明編『日本文法大辞典』明治書院 pp. 529-531
- 阪田雪子 (1971) 「でも」松村 明編『日本文法大辞典』明治書院 pp. 531-532
- 佐久間鼎 (1940) 『現代日本語法の研究』厚生閣
- 定延利之 (1995) 「心的プロセスからみた取り立て助詞モ・デモ」『日本語の主題ととりたて』くろしお出版 pp. 227-260
- 田川拓海 (2005) 「テ形と共起するとりたて詞について」『言語学論叢』 24pp. 1-14
- 沼田善子 (1986a) 「第2章とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社 pp. 105-225
- 〃 (1986b) 「副詞句のとりたて —— 「と」「ば」「たら」「なら」と「も」 ——」『都大論究』 23 東京都立大学国語国文学会 pp. (19)-(32)
- 〃 (2006) 『現代日本語とりたて詞の研究』筑波大学博士(言語学)学位請求論文
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- Fukui, Naoki (1986) *A Theory of Category Projection and Its Applications*. Ph. D. dissertation, MIT.

追記：本稿は、「諸外国語と日本語の対照的記述に関する方法論的研究」日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B))(平成15~18年度)研究代表者青木三郎による研究成果報告書『諸外国語と日本語の対照的記述に関する方法論的研究』(2007)に掲載された論文に加筆、修正したものである。